

「女性医師の心構え」としての提言

八木 恵子

手束病院外科

(平成13年8月20日受付)

私達女性医師や、これから医師を目指す女学生の方々に、医療における男女同権を目指すために必要な、女性医師としての心構えを呈示したいと思う。

まず、女性であることに甘えてはいけない。このことは、今回のアンケート結果でも、仕事を続けていく上で必要なこととして、女性医師自身が最も多く回答を寄せたものである。家庭があるから、子供がいるからといって男性医師より少ない仕事量ではいけない。同権をいうなら同じ義務を果たすのは当然である。もちろん、当直も同僚男性と同じ回数をこなさなければならないであろう。

次に、仕事を続けていくという強い意志が必要である。もともと女性が一家の生計を支えているなら、家庭のために仕事をやめるなどという考えはでてこないはずである。やめても夫の収入で生活できるということが、かえって仕事を続けるための弱点になっていると思う。「仕事と家庭の両立ができないのなら、無理せずやめたらいいじゃないか。やめても食べていけるだろう。」という意識が職場や家庭の中にあるからこそ、男女格差が出てくるのではなかろうか？ 何のために仕事をするのか？ 仕事への目的意識をしっかりと持ち、周囲もそれを理解することが男女同権への第一歩と考える。仕事の目的は個々人で違うであろうが、今まで学んできたことを無駄にしないという姿勢は必要と思う。

第一線で働くためには子供は産まない方がよい。これ

は、極論ではあるが、医師は24時間患者さんに対し責任を負っている。時間外の呼び出しにも対応できなくてはならない。いくら社会制度を充実させて、夜間保育や病児保育ができるようになったとしても、肉親の保育に勝るものはない。どんなきれいごとを並べても、第一線で働くためには、子供を犠牲にすることになると思う。また、育児にさく時間と手間は甚大で、医師として、研鑽に励む時間は物理的に少なくならざるを得ないと思う。

それでは、仕事と家庭を両立させるためにはどうしたら良いのだろうか。残念ながら、どちらも100%を目指すことは不可能である。当直のできない場合は、当直をしなくてよい職場を選ぶなど、個々人の家庭環境に応じて両立の可能な職場を選択することが大切だと思う。そのことが、自分の目指したスタイルと異なっても許容し、月並みであるがベストを尽くすことが大切ではなかろうか？

最後に、男性医師に一言、女性医師が仕事から帰って、家事をし、育児に時間をさいている間、あなたがたは、文献の一つも読み、患者の一人も診られるわけである。少なくとも女性医師の1.5倍は仕事できて当然である。それなのに女性医師と同程度しか仕事もせず、家事も育児も協力できないというなら、当直や産休の代わりをつとめてほしい。あなたがたには余力は十分残っていると思うが、いかがであろうか？ ということは女性医師の甘えなのであろうか？